

令和7年度
平和大使派遣事業
(知覧・広島・沖縄)
報告書



大府市

目次

| | |
|----------|----|
| ・事業の概要 | 1 |
| ・日程 | 2 |
| ・平和大使の紹介 | 6 |
| ・知覧派遣 | |
| 井上侑香 | 8 |
| 鈴木香澄 | 10 |
| 田平咲人 | 12 |
| 高木すず | 14 |
| 服部春香 | 16 |
| ・広島派遣 | |
| 早川一路 | 20 |
| 鈴木誠一郎 | 22 |
| 楠元菜穂 | 24 |
| 深谷泰雅 | 26 |
| 深谷洵太 | 28 |
| ・沖縄派遣 | |
| 村田遥奈 | 32 |
| 成田栞麻 | 34 |
| 松下颯樹 | 36 |
| 六車美遥 | 38 |
| 杉浦雛月 | 40 |
| 山田遥真 | 42 |
| 田平空々 | 44 |
| 斉藤多穂 | 46 |
| 小島利生 | 48 |
| 上村 琉 | 50 |
| 渡邊智咲 | 52 |
| 石川葵唯 | 54 |
| ・平和都市宣言 | 56 |

事業の概要

- 1 目的 次の世代を担う若者を「平和大使」として戦争により大きな被害を受けた国内都市に派遣し、戦跡・戦争関連施設の見学、戦争体験者や平和戦跡ガイドとの意見交換などを通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、同世代を始め、広く市民に伝えてもらうことを目的とする。
- 2 期 日 ①知覧派遣
令和7年7月23日（水）～25日（金） 2泊3日
②広島派遣
令和7年8月 5日（火）～ 7日（木） 2泊3日
③沖縄派遣
令和7年8月20日（水）～22日（金） 2泊3日
- 3 派遣人数 ①②各5人、③12人
事務局として以下の職員が随行
①地域福祉課職員（2人）
②地域福祉課職員、企画広報戦略課職員
③教育委員会指導主事、大府中学校長、大府南中学校教諭
- 4 選出方法 広報おおぶ等で募集し、選考会において選出
- 5 対象学年 ①高等学校第1～3学年
②③中学第1～3学年
- 6 報告書 平和祈念戦没者追悼式参列者へ配布するほか、市図書館及び中学校図書室へ設置。市公式ウェブサイトへ掲載

日 程

【委嘱状交付式・事前勉強会】 令和7年6月14日（土）

時間 午前9時30分から

場所 市役所2階201～204会議室、ピースあいち（名古屋市名東区）

内容 市長あいさつ、委嘱状交付、自己紹介、事業説明、事前勉強会（①紙芝居作品鑑賞「テンニンギク」（作：あいばまさやす氏）、②大府市遺族会員による戦争体験講話、③ピースあいち見学（午後））

【事前勉強会】 令和7年7月5日（土）

時間 午前10時から

場所 市役所地下会議室001・002

内容 SNS研修、板津昌利氏（知覧特攻平和会館初代館長：故 板津忠正氏長男）講話

【知覧派遣】 令和7年7月23日（水）～25日（金）

（1日目）

6：20 市役所集合・出発

6：55 セントレア到着

8：10 セントレア出発

9：45 鹿児島空港到着

12：00 知覧特攻平和会館見学

15：00 ホタル館富屋食堂見学

17：00 宿泊先到着

（2日目）

7：15 宿泊先出発

9：00 鹿屋航空基地史料館見学

10：10 戦跡フィールドワーク（鹿屋平和学習ガイドによる案内あり）

15:40 仙巖園・尚古集成館見学

17:30 宿泊先到着

(3日目)

7:45 宿泊先出発

9:00 万世特攻平和祈念館見学

11:15 鹿児島空港到着

13:35 鹿児島空港出発

15:00 セントレア到着

16:00 市役所到着 解散

【事後勉強会・おおぶ平和のつどい事前打合せ】 令和7年7月31日(木)

時間 午前10時から

場所 市役所2階201会議室

※知覧派遣者、おおぶ平和のつどい司会者のみ出席

【おおぶ平和のつどい】 令和7年8月3日(日)

時間 午後0時30分から午後4時20分まで

場所 おおぶ文化交流の杜こもればいホール

内容 大府市制55周年記念事業として開催

東京大学先端科学技術研究センターの小泉悠准教授とのパネルディス
カッション(知覧派遣者)、運営補助(広島・沖縄派遣者)、
映画「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」鑑賞

【広島派遣】 令和7年8月5日(火)～7日(木)

(1日目)

8:30 市役所集合・出発

11:40 広島駅到着

13:30 広島平和記念資料館見学

17:30 宿泊先到着

(2日目)

5:50 宿泊先出発

8:00 平和記念式典出席

10:00 第1回全国こども平和サミット出席

14:00 千羽鶴献納、平和記念公園（ボランティアガイドによる案内あり）・原爆ドーム・広島原爆死没者追悼平和祈念館・灯籠流し
見学

19:00 宿泊先到着

(3日目)

7:40 宿泊先出発

9:00 第1回全国平和学習の集い出席

15:00 広島駅出発

19:30 市役所到着 解散

【沖縄派遣】 令和7年8月20日（水）～22日（金）

(1日目)

6:30 市役所集合

7:10 セントレア到着

7:55 セントレア出発

10:10 那覇空港到着

12:30 ひめゆり平和祈念資料館見学

14:00 沖縄県平和祈念資料館見学

16:40 アメリカンビレッジ見学

19:40 宿泊先到着

(2日目)

- 9:00 宿泊先出発
- 9:10 チビチリガマ見学
- 10:00 シムクガマ見学
- 10:50 座喜味城跡見学
- 11:30 ユンタンザミュージアム見学
- 13:50 平和講話及び平和ディスカッション (読谷村文化センター)
- 16:30 入村式 (読谷村役場)
- 17:00 男女別に分かれ、各民家で夕食 (沖縄料理) づくり→宿泊

(3日目)

- 8:50 離村式
- 10:20 那覇市国際通り見学 (街中ガイドによる案内あり)
- 13:30 那覇空港到着
- 15:30 那覇空港出発
- 17:40 セントレア到着
- 18:30 市役所到着 解散

【派遣報告会】 令和7年9月13日(土)

時間 午後1時から

場所 市役所2階201～204会議室

内容 派遣報告の発表、平和祈念戦没者追悼式の概要説明、「わたしの平和宣言」作成

【平和祈念戦没者追悼式】 令和7年10月5日(日)

時間 午前10時から

場所 市役所地下多目的ホール

内容 献花、「平和へのメッセージ」「わたしの平和宣言」の発表

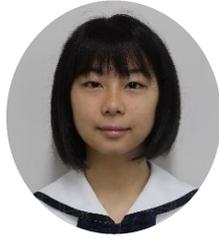
平和大使の紹介

【知覧派遣】

(順不同、敬称略)



井上 侑香



鈴木 香澄



田平 咲人



高木 すず



服部 春香

【広島派遣】



早川 一路



鈴木 誠一郎



楠元 菜穂



深谷 洵太



深谷 泰雅

【沖縄派遣】



村田 遥奈



成田 栞麻



松下 颯樹



六車 美遥



杉浦 雛月



山田 遥真



田平 空々



斉藤 多穂



小島 利生



上村 琉



渡邊 智咲



石川 葵唯

平和を願う彼らの言葉

名城大学附属高等学校2年 井上 侑香

私は平和大使として、知覧を中心に様々な戦跡を訪れました。その中で特に感銘を受けた場所が、知覧特攻平和会館と鹿屋航空基地史料館です。

まず、知覧特攻平和会館では、多くの特攻隊員の遺書に記されていた3つの想い「朗らかに笑って征く」「特攻を最初で最後の親孝行とする」「家族の健康を祈る」に触れました。多くの遺書に共通していることは“家族を想って記している”という点でしたので、最初は特攻を前向きに捉えているように感じました。しかし特攻隊員が寝泊まりしていた三角兵舎を訪れた際、出撃前夜には隊員の「お母さん…」とすすり泣く声が聞こえたという話を聞き、家族に心配させまいと遺書の上では気丈に振る舞う彼らの優しさに触れ、言葉を失いました。“自分が散った後には必ず平和がくる”と信じ願った特攻隊員の想いに直接触れたことで戦争の恐ろしさを再認識したと共に、後世へと紡いでいくことの重要性を改めて感じました。

次に、鹿屋航空基地史料館では、特攻を命令した指揮官の立場から戦争への想いに触れることができたのですが、指揮官の中には自分の部隊から特攻隊員を出すことを最後まで拒んだ方もいたことを知りました。これまでは“指揮官は特攻に肯定的だった”と学ぶことが多かったのですが、時代の波に抗い、若い命を無駄にさせないようにと奔走した指揮官もいた、ということが私にとって大きな驚

きでした。

これら 2 つの戦跡を訪れ感じたことは、一人ひとりの想いや言動の背景に直接触れることで更なる学びにつながる、という事です。

終戦から 80 年が経ちましたが、各地の戦跡は今なお戦争の悲惨さを私たちに伝え続けています。また、戦争に終わりはありますが、人々の心の傷は簡単に癒えることはありません。だからこそ、戦争を二度と起こしてはいけません。だからこそ、戦争を風化させないためにも、愛する人や国を守り抜くために戦った方々の想いや決意を後世に残し続けていくことが今を生きる私たちの使命であると強く感じています。そのためにも今回学んだことを、家族や友人など周囲に直接伝えたり、SNS などで戦争の事実を伝えたりしていきたいと思えます。



知覧特攻平和会館・特攻勇士の像前での記念撮影

知覧で学んだこと

星城高等学校2年 鈴木 香澄

私は平和大使として、知覧への派遣に参加しました。知覧は太平洋戦争時に特攻作戦の基地が置かれていた場所です。学校での歴史の授業や事前学習を通して特攻について学び、特攻については十分理解しているつもりでした。しかし、実際に現地へ行き特攻に関する展示物を目の当たりにしたことで、自分が理解していたと思っていたことはごく一部にすぎなかったのだと実感しました。

派遣の中で最も記憶に残っている場所は知覧特攻平和会館です。そこには特攻隊員の方たちの遺影と遺品、手紙が展示されていました。これまで遠い世界の話だと思っていた「戦争」が、現実生きていた人たちの人生そのものだったのだと感じさせられました。特に驚いたことは、家族や恋人に宛てた手紙に、「国のために」や「喜んで」という前向きな言葉が多く見られたことです。派遣の中で特攻隊員の最年少は16歳だと知りました。今の私よりも年下です。また、婚約者や生まれたばかりの子どもを置いて特攻を志願した人も多くいました。自分がもし特攻作戦に参加することになっても、覚悟を決めることは絶対にできないなと思いました。知覧特攻平和会館は心が苦しくなる場面が多かったです。しかし、今を生きる私たちはこれをただ辛いで終わらせるのではなく、そこから学びを得て、次の世代へ受け継いでいく必要があるのだと改めて感じさせられました。

戦争の悲惨さや平和の大切さを次の世代へ伝えていくためには、

まず現地へ行き理解を深めることが重要だと思います。その上で、自分が見聞きしたこと、感じたこと、考えたことを周囲の人々に伝えるべきであると思います。そして、派遣後に開催された「おおぶ平和のつどい」のパネルディスカッションで小泉悠先生が仰っていたように、なぜ特攻が起きてしまったのか、その背景を考え続けたいです。

私は、譲歩による話し合いだけでは解決できない問題が、戦争へとつながっていくのだと考えました。しかし、それだけで説明できるほど単純ではないと思います。だからこそ、考え続けることが必要だと思いました。身近な喧嘩でも、原因が分からなければ同じことを繰り返してしまうように、戦争についても原因を自分の頭で考え、明らかにし、それを語り継いでいくことが大切だと感じました。



「おおぶ平和のつどい」パネルディスカッション
(おおぶ文化交流の杜こもればいホール)

知覧派遣 特攻から学ぶ平和

名古屋市立工芸高等学校 3年 田平 咲人

戦争って、何故起こるのでしょうか。

それは、相容れない主張と主張のぶつかり合いであり、話し合いという平和的解決を放棄してしまった結果です。僕は知覧へ、特攻隊について学ぶ旅に出ました。そこで見たものは、今までの僕の知識を遥かに超えるものでした。

当時、十代から三十代の青年が全国から集まり特攻隊に志願しました。そんな彼らが飛び立っていった知覧には、沢山の遺影とともに遺書が残されています。そこには、「特攻には行きたくない。」という本心が書かれているものと予想していましたが、実際見てみるとそのような内容は一切書かれていませんでした。検閲のある時代であったため、本心を書くことができない環境だったのかもしれない。それでも予想に反して「恋人や家族の為に命を捧げに行きます」と書かれたものが多く見られたことに衝撃を受けました。自分が犠牲になることで大切な人を守ることができる、幸せにできると信じていたのです。しかし、犠牲の上で誰かが幸せになることはありません。

特攻隊員たちがこのような考えに陥った理由を考え、僕は当時の教育について調べました。第二次世界大戦時の教育で用いられていた「教育勅語」には、「天皇陛下」や「国」への忠誠心、愛国心を強調するようなものが多く見られます。偏った過激な内容でも信じられるしかなかったのでしょうか。道を外れた教育が、結果としてこん

なにも胸が張り裂けそうな出来事を招いてしまったのです。

「おおぶ平和のつどい」で小泉悠先生から投げ掛けられた言葉が僕の心に残っています。

「一か百かでは無いグラデーションの中にある方法を模索していくこと。抑止力もその一つである。」

たとえ争い事を解決することができなくても、戦争を起こさない努力をし続けること。それを諦めないことが戦争を抑止し、平和な未来を作るためのカギなのだと気付かされました。

僕は今回の経験から、真実を「知り」そして「理解する」ということがどれほど大切なのかを実感できた気がします。現地でしか知り得ない真実や当事者の感情は自分が当事者の立場に立って、そこで初めて理解できます。そして今度は自分が、真実をありのまま周囲に伝え、それぞれが理解を深めていけるよう、生涯にわたって広め続けていきたいです。僕は大府に戻ってから周囲に自ら平和大使であることを告げ、特攻隊の伝聞活動をしています。僕の言葉に真剣に耳を傾けてくれる周囲の姿を見て改めて大切な仕事だと感じています。今後は、学校で特攻隊の話をする機会が持てるようにしていきたいです。

僕ひとりの力でできることは限られていますが、たくさんの「ひとり」が集まれば世界を変えられるはずです。「ひとり」の力が膨らみ、大きな力となって平和な世界が作られることを願います。

特攻隊員の想いにふれて

金城学院高等学校2年 高木 すず

私は今回、平和大使として沢山の経験をしました。知覧、鹿屋、万世の特攻に関する資料館を訪れ、多くの写真や遺書の展示を見ました。私の中で特攻とは敵に体当たりして命を落とす非人道的な作戦であり、きっと特攻隊員たちは遺書の中では弱音を吐いていないかと思っていました。しかし実際は、誰一人そんなことは書いていませんでした。遺書には両親や恋人への感謝やお詫び、天皇を崇める言葉などが達筆で綴られていました。遺書の冒頭、両親へ親不孝な自分を詫びるような内容のものも見られましたが、私は「そんなわけない、彼らのどこが親不孝なんだ、私の方がよっぽど」と虚しくなりました。また遺書の中に当時の日本を非難するものもあり、それでも「日本がいつまでも続いていけるように自分は飛んでいく」という覚悟が記されていました。特攻隊員たちは日本や愛する人、今を生きる私たちを守るために戦っていたということが文章から伝わってきました。また写真も寂しそうな表情より笑顔で朗らかなものばかりでした。その理由は家族に心配させたくない、悲しい気持ちになって欲しくないという彼らの優しさによるものだと知り、自分と変わらない歳の彼らに驚かされました。

私が展示物の中で強く印象に残ったのは桜花という航空機です。桜花とはプロペラやタイヤもない、重さ1,200kgの爆弾を積んだ機体で、人間爆弾とも呼ばれていました。特攻隊員が乗り込み、母機から切り離されて敵艦に体当たりするというものです。桜花に

積まれていたエンジンはたったの3本、1本当たり9秒しか稼働しないのです。私は聞いていてうんざりしました。人の命をなんだと思っている、バカにするな。選ばれた人はどう思ったのでしょうか。

私は知覧派遣に参加したことで、自分の目で見ても耳で感じ体験することの大切さをより理解しました。戦争はかけがいのないものを奪い、消えない傷を人々に残します。もう二度と起こしてはなりません。派遣後「おおぶ平和のつどい」で自分たちの意見や体験を伝えることができました。トークテーマに戦争の記憶の風化について話がありましたが、私の中で戦争は風化しないと思います、絶対にさせたくない。その理由は、自分の興味があるものは深く突き詰めていくと思うからです。自分から調べたり、そのゆかりのある場所まで訪れたりするなど、体が勝手に動いていくものです。戦争について興味を持ちにくい人には身近なことから、例えば戦争を題材にした本や映画、ネットの記事からと自分が興味を持ちやすい媒体から挑戦してみるのが良いと思います。自分が平和大使として経験したことを多くの人に色々な道具を使って伝え続けることで1人でも興味を持ってくれたら。そうやって平和をつないでいくことが、戦争の記憶を風化させないためには大切だと思っています。中でも、私は遺書を読み、文章には人の思いや記憶を未来に伝える力があると強く感じました。だからこそ、私も学びを深めながら、今回の体験を次の世代にも伝え続けていきたいです。

知覧派遣を通して

愛知商業高等学校2年 服部 春香

私は今回の知覧での派遣活動を通して、今ある生活は当たり前のものではないと改めて気付かされました。知覧に行く前の勉強会で平和とは何かについて考えたとき、私は「人としての権利が守られていること」と書きました。そして知覧での派遣活動を終えた現在は「たくさんの人によって守られた今ある生活」だと思っています。少なくとも今より人としての権利が守られていなかった戦時中に、未来の日本のために多くの方が命を捧げられたという事実を自分の目で見て知り、私たちはその方たちの思いが込められている日本で生きているのだと実感しました。

初日に訪れた知覧特攻平和会館で「笑ッテ散ロウ」という遺書を見ました。その遺書を見たとき、自分と変わらない歳の人がどうしてこんな覚悟ができるのだろうかと思いました。戦争がなければこの人たちも今の私たちのように、大事な人との生活を送っていたのだと思うと、改めて戦争というものの怖さを感じました。また、実際に特攻作戦で使われていた戦闘機や地下壕の展示も印象に残っています。今までネットなどで見たことはありましたが、実際に自分の目で見ると感じるものが全く違いました。戦闘機の中は狭くて、たくさんの機械があって、これに一人で乗って飛ぶことを考えると自然と冷や汗が出ました。見学した地下壕は、特攻隊員が突撃の合図として送るモールス信号を受信する場所でした。特攻隊員の方たちはどんな気持ちで最後の信号を送ったのだろうかと考えても、自分に

は想像ができず、ただ胸が締め付けられました。これは実際に現地で自分の目で見て話を聞いたからこそ感じたものです。だからこそ、より多くの人に伝えていく必要があると思います。

戦争はおとぎ話でも迷信でもなく、実際に日本で起きた出来事であり、多くの人が体験した現実です。自分とは関係ない昔の話と片付けてしまうのではなく、多くの人たちに知ってもらうことが大切です。知ってもらうことで、戦争の記憶を風化させないことにもつながると思います。今回貴重な体験をさせていただいたことを無駄にせず、私自身が学んできたことを身近な人から伝えていくようにしたいです。そしてたくさんの方が今日までつなげてくださった一日一日を大切に生きていきたいです。



戦跡フィールドワークで訪れた「串良地下壕第一電信室」の見学

広島派遣

2025.8.5（火）～7（木）



「おおぶ平和のつどい」などで集められた千羽鶴の献納
(広島平和記念公園内 原爆の子の像)

平和のためにできること

大府中学校2年 早川 一路

私は広島派遣で、今まで学んだことのない広島の実情を知ることができました。私が平和大使に応募したきっかけは、学校の授業などで学んだことを自分の目で見てみたいと思ったからです。そして、この派遣では自分が想像した以上の経験を得ることができました。

広島平和記念資料館では、広島戦争や原爆に関する知識を深めることができましたが、それ以上に、教科書や本には載っていない遺族の方、被爆者の方の言葉や思いを知りました。同時に、その言葉や思いから学んだこと、感じたことを伝えていく平和大使としての責任も感じました。

全国から集まった学生とのディスカッションが、この派遣の中で一番忘れられない経験となりました。私は普段、友達や家族などと話す際、平和や戦争の話題を避けていました。人の命が関わることなので、暗い雰囲気になってしまうと思ったからです。しかし、今回の広島派遣の中で、初めて同年代の人と「世界はどうすれば平和になるのか。」というテーマでディスカッションした際に、争い自体が悪いのではなく、争いを解決する方法が武力であることが悪いということに気づき、世界の全員が自分なりの幸せを感じられることが本当の平和なのだという新しい考えが私自身に生まれました。

派遣前は「平和の大切さを伝えよう」と思っていたのですが、今は少し違います。平和の大切さを伝えることももちろん重要ですが、

私がすべきことは、多くの人が「平和」に触れるきっかけを作ることだと今は考えています。例えば、戦争に関する映画を勧めてみることも一つです。そんな小さなきっかけを多くの人に作る手伝いができれば、そこから人の思いが広がっていくと思います。

日本から戦争を経験した方がいなくなる未来は、そう遠くありません。だからこそ、日本で起きたことを風化させないためにも、私は今回の派遣で学んだこと、感じたことを活かし、多くの人に平和のバトンを受け取ってもらうための活動を行いたいと思います。そして、私たちの世代がそのバトンを次の世代に渡す役割を果たしていきたいです。



原爆の犠牲者を慰霊し、平和を願う灯籠流し（広島市中区・元安川）



平和学習の集いでの発表（広島国際会議場）

平和な世界になるために

大府西中学校 1年 鈴木 誠一郎

僕が今回の派遣で見たのは、平和とは程遠い広島でした。

火傷を負った人や水を求める声でいっぱいになったまち。原爆で破壊され、跡形もなくなったまち。その日食べるはずだったお弁当。

もし自分が、自分の住んでいるまちがそうなったらと考え、戦争は絶対にしてはいけないと思いました。ある日突然、当たり前の日常が奪われることに、戦争の悲惨さや悲しみを感じました。そして改めて、平和であることの大切さを痛感しました。

国と国同士の争いの中で、平和に暮らしている人たちが巻き込まれるのはおかしいと思います。僕は、平和とは「人々の安全がしっかりと確保されていて、自分たちの自由を誰にも奪われないこと」だと思います。

今も世界では、戦争をしている地域・国があります。そこでは、宗教や国益、考え方の違いから対立し、お互いの思いを言葉で伝え、尊重し合うことができなくなり、争いになっています。僕はそのような国々で、広島や長崎で起こったことが繰り返されてほしくないです。

そのために、話し合いによる解決を行う必要があると考えます。

話し合いをすることでお互いの意見を尊重し合うことができ、争いという手段を取らないことで、平和に近付くと思うからです。

そのために、僕に今できることは何か。募金活動などに参加していきたいです。また、平和大使として学んだことや体感したことを、身近な人に伝えていくことが大切だと考えます。これから平和な心を周りに伝える身近な一歩として、困っている人や助けを必要としている人に寄り添い、助けていきたいです。この考え方は、one for all all for one の考え方です。困った国があったらその他の国がその国を助ける。助けられた国は、また困っている国を助ける。世界がこの考え方をしていければ、戦争や核がなくなり、みんなが平和になれると思います。そんな世界になるまで、平和を求める人たちと協力して、一歩ずつ頑張っていきたいです。



広島平和記念資料館見学

迎える平和

大府西中学校3年 楠元 菜穂

私が平和大使派遣事業で学んだことは2つあります。

1つ目は「自分たちにできることは何か」ということです。派遣事業を通して自然と「平和」について考えるようになりました。私はこれまで、戦争について詳しく学んだことがなく、日常で平和を意識することもほとんどありませんでした。戦争を体験していない世代であり、身近に体験者も少なくなっているため、考えるきっかけがなかったのだと思います。しかし、今回広島を訪れ、平和について考える時間を持ったことで、私たちの身近な生活の中にも平和をつくる行動があるのではないかと気付くことができました。

2つ目は「戦争の悲惨さ」です。広島平和記念資料館では被爆当時の写真や衣類を目にし、当時の人々の苦しみを強く感じました。これまで教科書や映像でしか知らなかった戦争の現実を、自分の目で見ることで胸が締め付けられる思いになりました。また、被爆者の方のお話を直接聞き、写真や展示では伝わらない緊張感や臨場感を味わいました。約80年前の出来事が、まるで今起きているかのように迫り、鳥肌が立ちました。この体験を通して、戦争は二度と繰り返してはならないと強く思いました。

今回学んだことを、私はこれからの生活の中で実践していきたいです。例えば、日常の中で相手の気持ちを思いやること、互いを尊重して対話することも平和につながると感じました。そして何より、戦争があったことを忘れてはならないと強く感じました。ま

た、広島で学んだ戦争の悲惨さや平和の大切さを、まずは家族や友人に伝え、もっともっと知ってくれる人が増えたら良いと感じました。平和大使としての経験を忘れず、今回の派遣で学んだ私自身にできる小さな行動から始めて、それを少しでも周りに広めることで、平和な未来を築いていきたいと思えます。



ボランティアガイドによる説明（広島平和記念公園内）



灯籠に平和のメッセージを書く様子

平和とは何か

大府南中学校3年 深谷 洵太

今回の広島派遣では、平和という言葉の意味について、改めて深く考えることができました。また、戦争で受けた被害を目や耳で学び、原子爆弾が非人道的な兵器であることを再確認する機会にもなりました。そして、これらのことを私の同年代の人たちが、「昔話」としてしか捉えなくなっているであろう現在の状況を、これから変えていかなければならないことにも気付きました。

広島平和記念資料館では、今まで少しピン트가合っていなかった戦争の被害を実際の出来事として受け止めることができました。過去の出来事を過去に置き去りにしては駄目で、現在、そして未来まで、平和大使として伝えなくてはならないと思いました。被爆体験講話では、教科書や資料には載っていないような、被爆者の細かい心情や出来事を聞くことができました。また、多くの人が放射線に苦しめられたことを理解しました。そして、被爆した人にしか理解できない壮絶な痛みや苦悩があり、それが今も心や身体に形となって残っていることも知りました。

このように、今回の派遣は、今までとは違う目線から、戦争や原子爆弾の被害に焦点を合わせて学ぶことができた3日間でした。

「平和」というものは、「争いが無い」ことだけを指すものだと思っていましたが、現地にあった千羽鶴を見たり、平和学習の集いに出席したりしたことで、考え方が変わりました。千羽鶴は多くの人が協力して完成させたものであり、平和もこれと同じように、

一つの目標に向けてみんなが手を取り合って進んでいくという姿勢があれば、自ずと平和な世界になっていくのではないかと思うようになりました。この気付きを、まずは身近な人に話したり、学校で発信したりしていきたいと思います。そして、これから何年経ってもこの経験を忘れず、人に話し続け、多くの人にこれからの平和について考えてもらうことができるよう、きっかけを与えられるようになりたいと思いました。



千羽鶴の献納（広島平和記念公園内 原爆の子の像）



平和学習の集いでの発表（広島国際会議場）

平和へのメッセージ

大府南中学校3年 深谷 泰雅

僕が平和大使派遣事業で学んで、考えたことは2つあります。

1つ目は戦争の凄惨さです。僕は「戦争」について学びたくて平和大使派遣事業への参加を希望しました。教科書に載っていない「戦争」の事実に興味があり、広島に向かいました。広島平和記念資料館では、実際に被爆した時の写真や絵を見ました。一目見ただけでその時の苦しさが伝わり、その時の被爆した人たちの気持ちを考えたくないほど苦しい感情になりました。そこには、教科書や事前学習では学ぶことができなかった凄惨さがありました。

また、被爆した人から聞いた話も印象に残っています。絵や写真とはまた違う生々しさで、自分がそこにいるかのような臨場感や緊張感がありました。今、目の前で起きた出来事を見せられているようで、鳥肌が立ち、五感を覆いたくなるような感情になりました。しかし、僕自身が聞きたかった貴重なお話を、しっかりと受け止めようと最後まで聞くことができました。

広島で見たもの、聞いたものは、実際体験していないのに苦しくなる内容ばかりでした。この出来事は二度と繰り返してはいけないと強く感じました。

2つ目は「平和」への道です。平和大使派遣事業の中では、自然に平和について考えていました。その時、僕は今までの普段の生活であまり平和については考えたことがないことに気付きました。理由は、平和について考える必要がなかったからだと思います。今日

話せなくても明日話せる友達がいる、今日できなくても明日できれば良くて、常に明日が当たり前に保証された毎日を過ごす中では考える機会が生まれなかったのだと思います。

ある新聞の記事で、被爆の被害を知った外国人から「私たちが憎んでいますか」と聞かれ、憎しみを持つことが「戦争」につながると考えて、悩みながらも「憎んでいない」と答えたというエピソードを読みました。きっと僕たちが作れる「平和」への道は、日常の何気ない会話の中で、自分以外の周りのことを考えて、自分が行動していくことだと思います。

僕は今回の経験を活かし、「戦争」を二度と起こさないため、「平和」への道をつくるために、派遣で学んだこと、考えたことを周りの人に話し、未来へつなげていきたいと思っています。



平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）の様子

沖縄派遣

2025.8.20（水）～22（金）



読谷村長と記念撮影をする平和大使（読谷村役場）

平和事業に参加して学んだこと

大府中学校 1年 村田 遥奈

私が、今回の沖縄派遣で印象深かったことは、ひめゆりの塔とガマです。

ひめゆりの塔では、怪我人の看病などをしたのは、ひめゆりの女学生だけでなく、様々な学校の女子生徒もいて、ひめゆりはその代表として有名だということを学びました。私は、ひめゆりだけが怪我人の看病などをしていると思っていたので、その事実を知って教科書だけでは学べないこともあるのだと思いました。

ひめゆり平和祈念資料館で学んだことは、1941年アジア太平洋戦争が始まり、決戦下の女学生としての自覚が求められたことです。学校では、防空訓練を行い、音楽の授業では軍歌が増え、英語の授業がなくなりました。1945年沖縄上陸戦が始まり、空襲によって、昼間は壕に避難しました。そして、沖縄陸軍病院への、動員が決まりました。南風原の小高い丘に40近い壕があり、その中には粗末な2段ベッドがありました。中は、重症の患者でいっぱい、水が欲しくて尿を飲む人、痛みと空腹で当たり散らす人、傷口の蛆虫を取ってくれと訴える人、脳症で幻覚を見て暴れる人、そして患者の多くは、十分な治療を受けられず、亡くなりました。

ガマを初めて見た時に本当にここに人が数日間でも暮らしていたのかと思いました。チビチリガマでは4月2日にアメリカ軍がチビチリガマにやってきました。すると、ガマにいた140人中83人が自決をしたそうです。そのうちの6割は18歳以下だったそうで

す。当時は、アメリカ軍は、男は殺した後戦車で引く、女は裸にして殺す、と教えられており、それなら自分でと思い次々と自決していったそうです。中には、ガマから出た人もいます。理由は、自分で死ねなかったからです。その人たちは助かりましたが、助かろうと思ってガマから出た人はいなかったそうです。アメリカ軍についていった人も、生き残ろうと思っておらず、アメリカ軍が来たらみんな死ぬと思い込んでいることが怖いなと思いました。

沖縄では、現地の考え方に触れることができました。この経験は、これから生きていく上での役に立つと思います。戦争体験がなく、身近に話を聞く機会がなかった私には大変貴重な体験となりました。私は、これからも目を背けずに、戦争史を身近な人に伝えていき、そこから知識の輪が広がっていくといいなと思いました。



ガマ（防空壕として使われた洞穴）の見学（読谷村・チビチリガマ）

戦争の記憶と平和への想い

大府中学校2年 成田 栞麻

平和大使に参加する前、平和はすごく当たり前のことで、戦争は遠くの場所で起きている縁のないものだと考えていました。今回、派遣事業で沖縄に行き、たくさんのことを学び、戦争を決して遠くの関係のないものとしてではなく、みんなが考えなければならないものと感じました。

沖縄で深く考えさせられたところは2つあります。

1つ目は、ひめゆり平和祈念資料館です。ここでは、私たちと同じ年頃の生徒たちが戦争のために戦闘に従事し、最後には集団自決や日本の軍隊によって民衆が殺されるといった悲惨な出来事があったことを知りました。また、戦争時は軍隊が住民を守らない現実や戦争についての間違った教育をして、それを生徒たちが従い何十万人もの人の命が奪われたことがわかりました。また、そうってしまった背景には、軍国主義を掲げ戦争についての間違った教育をすることで民衆の心を洗脳し、正しくないことを声に出せない状況を作り上げたことがわかりました。私は、戦争は領土の問題から国同士が勝手に始めるものだと考えていましたが、戦争をするために国民の心を支配して、当たり前の幸せを感じることができなくさせる恐ろしいものだと改めて実感しました。

2つ目は、戦争中、民衆が避難場所として使用したガマ(チビチリガマ、シムクガマ)です。第一印象は、このような場所に何十人も人が生活できるわけないと思いました。ゴツゴツとした岩、時期に

よっては、寒いとも思える環境にとどまったのは、本当に追い詰められてしまったからだと思いました。また、ここで起こった出来事、アメリカ兵が安全を保障し投降を呼びかけたのに、自決を選ん でしまったことを知り、本当に悲しい気持ちになりました。

2つの場所とも、戦争がなければ、平和であれば、絶対に人々が 楽しく集う場所だったと思います。

最後に、沖縄滞在中はきれいな海を見たり、現地のおばあと一緒に サーターアンダギーを作ったり、すごく平和で穏やかな気持ちに なることも多かったです。この平和がいつまでも続くよう、強い決 意を持って、これから私たちが戦争の記憶をしっかりと引き継ぎ、伝 えていきたいと思っています。



ガイドによる説明を受ける様子（読谷村・チビチリガマ）

平和を守るためにできること

大府中学校2年 松下 颯樹

僕は、沖縄へ平和大使として向かいました。資料館で写真を見たり、当時の話や不発弾がまだたくさん埋まっていることを聞いたりして、当たり前前に学校へ通える自分の暮らしがどれほど平和で恵まれているのかを派遣中に何度も実感しました。

沖縄戦では約20万人が亡くなっています。大府市の人口が約9万3,000人であり、その死者数の多さに驚きました。この中には僕らと同じ年代の兵士、学生も多く含まれています。県内の中等学校生は志願し特攻やひめゆり学徒隊として戦場に出たそうです。事実上強制だったという話もあるようです。自分がそのような状況であつたら、と考えるととても苦しい気持ちになりました。

一番印象に残っているのは、ガマという自然洞窟でのことです。見学出来たのは「シムクガマ」で、とても暗く狭いところでした。アメリカ軍が攻めてくると住民は「チビチリガマ」と「シムクガマ」に分かれ避難をしていましたが、「チビチリガマ」ではアメリカ軍につかまると虐殺されると教えられていたため、集団で自決した人たちがいました。自分の子どもに手をかける人もいました。

「シムクガマ」では正しい情報が伝わったため、誰も自決した人はいませんでした。なぜこのような正反対の結果になってしまったのだろうと思いました。そして、正しい教えはとても重要だと思いました。

戦争は身体だけでなく心も深く傷つき、一生忘れることはできな

い悲しいことです。戦争は価値観の違いや資源の奪い合いなどから起こるのではないのでしょうか。戦争を起こさないためには相手に思いやりをもって接し、話し合い、戦争の悲惨さを伝え、戦争が二度と起こらないように意識を共有することが必要だと僕は考えます。

自分が今出来ることは、今回学んだことを多くの人に正確に伝えることです。何の不安もなく暮らしていける平和の大切さ、自分の命、人の命の大切さについてこれからも話し合い、考えていきたいです。



ひめゆりの塔にて

私たちにできること

大府中学校2年 六車 美遥

私は、沖縄派遣に参加する前、戦争とはお互いを傷つけ合い、多くの被害を出すものだと思っていました。しかし、派遣後の今ではその考え方だけでなく、「人が人としていられなくなる」ということだと感じました。そう感じたきっかけとなるのは、チビチリガマに訪れた時のことです。

チビチリガマに訪れた時に見た石碑には、「死ぬのが国家のためだ」「生きていることは恥だ」という教えがあったということが書かれていました。当時は死ぬこと＝正義という考え方だったので、自ら死を望む環境でした。今考えればおかしいと思う話ですが、人が人としての考えを失っていたということです。どれだけ当時が厳しく、悲惨な社会だったのか伝わってきます。今は観光地として有名な沖縄ですが、たった80年前には多くの人が犠牲になって守り抜いたことで今があるのだと実感することができました。

戦争は過去のことではなく、今も続く大きな問題です。幸い、今の日本では戦争が起こっていません。だからと言って戦争を他人事として捉えるのではなく、自分事として捉えることが大切だと思います。もし自分の家族、友達や周りの人々が戦争に巻き込まれ、命の危険に晒された時のことを想像すれば、命が奪われる戦争をするべきではないということは明確です。

過去について知ることで未来を変えられる、そう私は思います。

日本は今年戦後80年です。戦争を経験した人達が少なくなって

います。その悲惨さを語り継ぐ人が少なくなっている今、戦争を起こしてはいけないという意識が薄くなっていくことに危機感を感じています。私たち若い世代が、過去に目を向け、戦争がもたらしたものが何かを知り、二度と戦争を起こしてはいけないという気持ちを一人ひとりが持ち続けなければなりません。そして平和な世界を作るにはどうすべきかを考え続けることが大切だと思います。私は今回の派遣事業で学んだこと、感じたことを、身近な人からより多くの人へ伝えていきたいです。



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

未来の平和のために14歳の私ができること

大府中学校3年 杉浦 雛月

私は、今受験生であまり余裕がない日々を送っていますが、これも平和だという事を、沖縄での平和大使派遣事業に参加して感じました。

特にこの事を感じたのは、ひめゆり平和祈念資料館に行った時です。「ひめゆり学徒隊」があった、という事は元々知っていましたが、ひめゆり学徒隊の方々の写真を見ていて、自分と同じくらいの年齢で、戦場に出ていることを初めて知り、とても驚きました。私は、視察でガマの中に懐中電灯を持って入るだけでも怖いと思いましたが、戦時中には私と同じくらいの年齢の女の子たちが、兵士たちの怪我の手当てや看護、食事の世話の仕事につき、そして「解散命令」後に、多くの人たちが命を落としました。資料館の写真の人たちの中には、教師になるはずだった夢が打ち砕かれて、消えてしまった人がいたことを学び、改めて戦争の悲惨さを知ることができました。

そして、なぜ戦争は起きてしまうのかという疑問が再び頭の中に浮かびました。戦争を起こす国の指導者たちは、平和を手に入れるために戦うといますが、私は間違っていると思います。私は、人と人、グループとグループ、国と国、それぞれが違う考えを持っていて、互いに譲り合いが出来ていないことが、戦争の起こる原因の一つだと思います。なので、人々がディスカッションのような事ができる場を作ることで、平和への第一歩になると思います。ディス

カッションをすることで、相手の考えをしっかりと聞き、相手を尊重する力が養われ、大きな争いがなくなっていくと思います。

私は、この中学3年の夏休みに、大府市の平和大使に選んでいただき、沖縄で学習させてもらいました。この学んだ、戦争の悲惨さを、絵などを使って、分かりやすく周りの同級生たちを始め、身近な人たちに伝えていきたいと思いました。分かりやすく伝えることで、多くの人に、少しでも関心を持ってもらい、戦争の悲惨さ・平和の大切さが後世の人たちに、繋がっていき、戦争のない平和な世界が築かれていくと私は考えます。



沖縄県平和祈念資料館でガイドから説明を受ける様子

平和への一歩

大府西中学校2年 山田 遥真

僕は今回、平和大使として沖縄へ行き、戦争中に現地で実際に起きた、たくさんの悲惨な出来事について知りました。そして「僕たちが何気なく過ごしている日常は当たり前ではないこと」、「何事も見たり聞いたりするだけではなく、実際に自分の目で確かめることの大切さ」に気づきました。

沖縄では、ひめゆりの塔やひめゆり平和祈念資料館、ガマなど、いくつかの戦争に関わる場所を訪れ、ガイドさんから戦争当時の詳しい話を聞きました。その中で、最も印象に残っているのは「チビチリガマ」です。

ガマの中は狭くて暗く、地面も平らではないため、とても快適に過ごせるとは思えません。しかし実際は、たくさんの人が米軍から逃れ、隠れていたと聞いて驚きました。そして、僕が立っていたまさにその場所で、80年前、多くの人が自決して亡くなったそうです。しかも、亡くなった人のうち6割は僕たちのようなこどもで、彼らは戦争により、望む生活が出来なただけでなく、米軍から殺されることを恐れて自ら死を望んでいたと知り、とても衝撃を受けました。そこには資料を見たり、人から話を聞いたりするだけでは分からない、実際に現地に行ったからこそ知る事の出来る深い悲しみや恐ろしさがありました。

普段、僕たちは毎日お腹いっぱいにご飯を食べ、学校に行き、先生や友達に会い、暖かい布団で眠ることが出来ます。常に何かに怯

えて過ごすこともありません。でもそれは決して当たり前のことではなく、ありがたいことなのだと改めて実感しました。

3日間の現地での学びを通して、僕はまず、家族や周りの友達、同世代の人たちに、実際に現地を訪れ感じたことや学んだことを伝えていきたいと思いました。そして、僕と同じ思いを持つ仲間と一緒に、平和のバトンを次の世代へとつなぎ、さらに日本だけでなく世界へと広げ、いつか戦争や争いのない平和な社会を実現できるよう、これからも平和大使として出来ることはないか、日々考え、一歩ずつ歩んでいきたいです。



「平和の火」の見学（沖縄県平和祈念資料館）

沖縄を知り未来を思う

大府西中学校3年 田平 空々

私が今回の派遣事業を通して強く心に思ったことは、「知らないということが一番怖い」ということです。

戦争中の日本人は米軍についての知識がありませんでした。自国兵からは、「捕虜になると酷い目にあう。捕虜になってはいけない。」と教えられていました。また、投降して捕虜になろうとして、自国兵に後ろから銃で撃たれた人もいたそうです。日本人が日本人に殺されたのです。それでも米軍は「服も食べ物もあるから出てきなさい。」と呼びかけましたが、自国兵の言葉を信じた日本人は出ていくことなく亡くなったそうです。米軍についての知識が無かったからこそ、一方的な教育がされていたからこそ、起きてしまった悲劇なのだと知ることができました。

「知らない」というだけで何人もの人が死んでしまうそんな世界を変えていきたい。私は、そう願わずにはいられませんでした。誰もが等しく学ぶことができる社会の実現とそれぞれの意思を尊重し合える関係性を築くことが「知らない」を無くしていく為に必要なことだと思います。戦争は、教育は、国を、人を、一瞬にして変えていく残酷なものです。私たち日本人はあの悲劇を経験したからこそ、それを受け継ぎ「知らない」世代に継承していかなければいけません。私はこれから学校で今回の経験を振り返り共有する時間を持ちたいと思っています。

私は、平和な社会を実現するために多文化共生社会を大切にし、

異文化を尊重していきます。様々な背景を持つ人々と積極的にコミュニケーションをとることで日本の良さを伝え「知らない」を「知っている」に変えていきたいのです。

「『知っていること』を増やしていくこと」それこそが平和への第一歩なのではないでしょうか。それが今回の派遣で得た私の学びです。



沖縄県平和祈念資料館での集合写真

戦争の悲惨さと平和の大切さ

大府北中学校 1 年 齊藤 多穂

私は大府の平和大使として沖縄に派遣され、戦争や平和についてより深く考えることができました。

実際に資料館や慰霊の場で目にした戦争の記録や、そこで暮らしていた人々の思いに触れ、戦争の悲惨さを強く感じました。戦争によって多くの尊い命が奪われたこと、そして平和な日常が突然壊されてしまったことは、決して過去だけの出来事ではないと実感しました。特に、ひめゆり平和祈念資料館で「砲弾の破片で手足を失った人、顎をえぐり取られた人、腸が飛び出した人、火炎放射で皮膚が焼けただれた人など、おごたらしい傷を負った人ばかりだった。」という文を読み、戦争の悲惨さを強く感じました。ひめゆり学徒隊の少女たちが当時どんな気持ちでぼろぼろになった兵隊たちを治療していたのかと思うと胸が痛み、自分と同じ世代の人たちがそんな苦しみを味わっていたことが信じられませんでした。

また、チビチリガマやシムクガマでは、目を閉じているのか開いているのかわからなくなるくらい暗い洞窟に、住民たちは不安や恐怖を感じながらも身を潜めていました。当時の人たちは米軍につかまると乱暴をされて殺されると聞いていたため、18歳の少女が母にひざまずき「私を殺してくれ」と頼んだところ、母は「娘が乱暴をされるくらいなら」と持っていた包丁で娘の首を刺しました。私なら自分を殺してくれなんて頼めないし、殺すこともできないので、当時の人たちはそれくらい辛い思いをしていたのだと思いまし

た。

あらためて戦争は、命や大切な人、当たり前の日常を簡単に奪うものだと痛感しました。

こうした過去を知った今、私は平和の大切さをこれまで以上に強く感じています。過去の戦争を他人事だと思わずに自分に落とし込み、戦争について考え、学ぶことが平和への第一歩だと私は思います。

戦争の悲惨さや平和の大切さを忘れずに、これからも命の尊さや今の生活のありがたみを実感し、自分自身も日々の生活の中で平和や対話を大切にしていける姿勢を実施していきます。また、現地での学びを決して忘れず、これからも平和の大切さを身近な人たちに伝えていきたいです。



「平和の礎」(沖縄県平和祈念資料館)

沖縄で学んだ平和について

大府北中学校2年 小島 利生

僕が沖縄派遣に行って学んだことは2つあります。

1つ目は、戦争がどれほど辛く残酷なものかということについてです。1日目に僕たちはひめゆりの塔に行きました。そこでは、沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒や教師の人たちの戦時中の生活について知りました。戦争が激化し食料が不足していたため1日にゴルフボールくらいの小さなおにぎり一個しか食べられなかったことや、空襲などによって亡くなってしまう人がたくさんいました。そして、僕たちのような学生が負傷した兵士の手当てをしたり、命を落とすこともあったのです。戦争というものは、多くの命を奪うだけの無駄な行為だと僕は思いました。

2つ目は、戦後生き残った人たちの生活についてです。沖縄戦は1945年6月23日に終わり、約20万人以上の方が亡くなりました。戦争で生き残った人も、家族や友人が亡くなり、戦争によって心に大きな傷を負った人が多くいました。また、戦争が終わったとしても食料が不足しているため餓死してしまう人や自分の故郷が米軍基地になってしまい、家を建てるのが困難になった人などもいました。戦争が終わったからといって、戦争が起こる前の生活にすぐに戻れるわけではなく、その後も長く多くの人を苦しめたことを知りました。

戦争は自分勝手な思いから起こるものだと思います。自分だけが

良くても自分の周りの人たちが、日本に住む人たちが、世界中の人たちが幸せでなければ本当の平和とは言えないと思います。本当の平和に近づけるよう、まず自分ができるとは身近な人たちのことを大切にすることだと思っています。派遣から帰ってきて僕は家族とごはんを食べに行きました。沖縄でどのようなことを学んだか、体験した楽しかった事について家族と語り合い、とても楽しい時間を過ごしました。今までは当たり前と思っていたことが実は幸せだったのだと思いました。これから僕はこのような時間を大切にしていきたいと思っています。



平和講話の様子（読谷村文化センター）

沖縄戦を通して学んだ僕が出来る事

大府南中学校3年 上村 琉

僕は沖縄の平和大使派遣事業で学んだことが2つあります。

1つ目は沖縄戦の残酷さです。ひめゆり学徒たちは、僕と同じくらいの年齢で過酷な状況におかれて命を落とした人も多く、おにぎり1個しか食べられないなど、苦しい暮らしを強いられていました。240人中136人が犠牲になったことを知り、戦争の悲惨さを強く感じました。もう戦争は絶対に繰り返してはいけないと思いました。

2つ目は、戦時中の市民の家族の思いについてです。沖縄戦の中、市民たちは家族を守ることを一番に考えて、互いに助け合いながら必死に生きていました。日々、爆撃や銃声が鳴り響く不安や恐怖の中で、大切な家族を守り抜こうとする思い、平和な暮らしに戻りたいと切実に願う気持ちがあったことを知りました。そして、離ればなれになったり、大切な人を失ってしまうつらい経験を多くの市民がしたりしたことを知り、自分がその立場だったらと考えて胸が苦しくなりました。資料館や現地で話を聞いて、平和や幸せ、当たり前前の生活がどれほど大切かを改めて感じました。

戦争のない世界をつくるのは簡単ではありませんが、僕は平和＝幸せだと思います。一人ひとりが自分の幸せを大切にして、それが周りにも広がれば、世界も平和になっていくと思います。今回の経験を通して学んだことや考えたことを、これからも多くの人に伝えていきたいです。



千羽鶴献納（ひめゆり平和祈念資料館）



ガマ（防空壕として使われた洞穴）の見学（読谷村・シムクガマ）

平和について学んだ私が今できること

大府南中学校3年 渡邊 智咲

私はこの派遣で特に印象に残っている訪問先が2つあります。

1つ目はひめゆり平和祈念資料館です。資料館で自分と同じくらいの女学生たちが軍の元に置かれ、怪我をした兵隊さんの治療を休むことなく四六時中行っていたことを知って驚きました。南風原の沖縄陸軍病院では、40近い壕が掘られ、狭くてジメジメした場所で粗末な二段ベッドに負傷した兵隊が寝かされ、辺りからは止むことなく聞こえる呻き声や悪臭が立ち込めている様子を想像するだけで体に戦慄が走りました。そのような場所で女学生が苦しくて逃げ出したくても必死に耐えて兵隊の世話や水汲み、飯上げ、死体の埋葬、時には軍からの指示で負傷した兵隊に注射で青酸カリを入れ殺すことを強制させられていたことを初めて知りました。

2つ目はガマです。チビチリガマでは米軍が外に出るよう誘導するも、酷いことをされて死ぬくらいならとガマの中で自分のこどもを殺したり、親がこどもに殺してと頼んだり、意図的に煙をたくななどの強制集団死が行われ、たくさんの人が亡くなったことを初めて知りました。私は当時の教育の中に「捕虜となるは恥とし、捕虜になるなら死ぬべきである」という考えが深く根付いていたことを知り、鳥肌が立ちました。ガマの外へ出た人は助かりたいと思って行動したのではなく、どうせ死ぬなら米軍に殺されようという思いからの行動であったことにも衝撃を受けました。シムクガマでは実際に入ることができ、足場が悪く滑ってしまうような、光が全く届か

ない真っ暗闇の中で、手元が微かに見えるほどのろうソクをつけて生活しながら、毎日銃声や爆音を聞いて過ごす怖さや大変さを、身をもって知ることが出来ました。

私はこの派遣を通じ、平和大使としてお互いを尊重し理解して認め合うこと、世界中で笑顔が溢れることが平和への近道であり、一番大切な事であると思いました。また沖縄でのディスカッションで戦争を知らないことがいちばん怖いということ気付かされたので、戦争を知らない小さい子から若い人を中心にこの派遣で培ったことを伝え、より多くの方がこれからの平和について考えるきっかけになるような活動をし、平和の輪を広げていきたいと思っています。



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

「命は宝」－感謝して生きる－

南山中学校女子部2年 石川 葵唯

美しい青い空と青い海。沖縄の素晴らしい景色が私を迎えてくれました。80年前、日本軍とアメリカ軍との激しい地上戦で多くの命が失われた地であるとはとても信じられませんでした。今回平和大使として実際にこの地に降り立ち、この目で見ることで、私の知らなかった事実を体験し、戦争と平和について考える貴重な機会となりました。

ひめゆり平和祈念資料館では、私と同じ年代で亡くなられた若い女学生の写真がたくさん展示されていました。彼女たちは動けなくなった兵士に注射を打って殺せと言われていたという証言もありました。実際の注射器や薬品などが並べられているのを見た時はショックで言葉が出ませんでした。

シムクガマは今回の派遣で私が最も印象に残った場所です。戦時中に避難場所として使用されていたガマの中には、実際に使われていたと思われる食器の破片が地面に埋まったままになっていて、沖縄戦下の生活が生々しく感じられました。ガイドさんの指示で明かりを消すと、まるで自分が当時のその場に存在するような感覚になり、不安と恐怖で足が動かなくなりました。こんな何もない真っ暗な場所で千人もの人が肩を寄せ合い、死の恐怖に怯えながら生活していたことを思うと涙が出そうでした。そして「ああ、私は今平和な国にいて、とても幸せなんだ。それはとても有難いことなんだ。」と気がつきました。感謝して生きる、そして自分の命と他人

の命を大切に思う。その心があれば戦争はなくなるのではないでしょうか？

民泊でお世話になったおじいさんが「命は宝」と私に語ってくれました。沖縄で生きてきたおじいさんの言葉はとても重く、私は一生忘れません。

私は平和とは自然になるものではないと考えます。大切に守り、伝えていかなければ簡単に壊れてしまうものかもしれません。世界中で戦争が起こっている今、これからの私たちに未来が託されていると強く感じます。今回の派遣で学んだことを一人でも多くの人に伝え、私自身も命を大切に、感謝して生きていきたいです。



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

平和都市宣言文

緑香るにぎわいの中、子どもたちの笑い声が響き、汗流し働く若者の姿や地域で活躍する元気な高齢者の姿が目映るまち、健康都市おおぶ。大府市は、戦争のない平和な社会のもと、健康都市づくりに取り組み、着実な歩みを続けています。

世界の恒久平和は、人類共通の願いであり、日本国憲法の普遍の原理です。しかし、今なお世界各地で、核兵器の保有、テロ行為、武力紛争などの平和を脅かす様々な問題が起きています。

先人から引き継いだかけがえのない平和のバトンを守り、次の世代の子どもたちにしっかりと渡していくことは、今を生きる私たちの果たさなければならない重大な責務です。私たち大府市民は、一人ひとりの命を大切に、核兵器、テロ行為などの脅威のない平和な社会の実現を強く訴えます。

日本国憲法の公布から70年目の節目の年に、恒久平和とあらゆる争いのない社会の実現を願い、ここに「平和都市」を宣言します。

平成28年9月27日 大府市



「平和都市宣言」石碑（平成29年9月1日設置）